第1章　青紫色のオーラ

旅立ちへと進む第1歩を踏み出し、僕を押してくれる
空色の春風が今日も僕の横を通っていった。
僕の名前は、赤星　レノ。中学1年生。お父さんの転勤で、
滋賀県から広島県鞆町に引っ越すことになった。
僕の性格は、おとなしくあまり話しかけるのは得意ではない。
僕は新幹線で揺られ、鞆のパンフレットを見ながら鞆へと向かった。
僕は、鞆に着いたが見慣れない風景に恐ろしい数の不安と絶望感に襲われた。すると、
お母さんが、「引っ越しのトラックが着くまで鞆の浦を観光しましょうよ」と、声をかけてきた。
僕は不透明のかすんだ声で、「うん」と答えた。緊張で固まった足を、なんとか前に運んだ。
今日も気持ちはブルーだった。

お母さんと観光をしていると、とてもみょうに奇妙なお寺か神社が山の上に立っていたのが
少し見えた。普通は「どうでもいいや」と言って見逃すが、気のせいだろうか、周りにへんな透
き通った青紫色のオーラを取りまとっていた。
僕は、少し怖い気がしたから急いでお母さんのもとへ戻った。

まあいろいろあって一日目が終わった。
やっぱり予想どうり友達はできなかった。僕は心の中でこうつぶやいた。
（まあ仕方ないよね　まだ一日目だから・・・）
こんなことばかりつぶやいてばっかだからだめなのは分かるけど、すぐ口にしてしまうこの言葉はよくない僕の口癖。
僕は失敗した時もすぐこのような言葉を発して、自分のぽっかりとあいた心を埋めようとする。
前の学校の僕のあだなは（ネガティブれの）。
僕は一つだけ頭から離れない言葉がある。それは、前の学校の時、僕へのからかいが多かった。
そんなときある一人のクラスメートから、
「からかわれて悔しくないの！」

「言い返せないの！」

「自分で変わるべきだよ！」
その言葉が、僕の中で繰り返し思い出す言葉だ。
誰が言ったのかまでは覚えてないけど、その「変わる」という言葉が頭から離れない。
ただそんな自分の思い出話を思い出しながら眠りについた。
そして学校生活が1週間終わった。
とくに嫌なことは無かったけど、少し変わった噂のようなものはあった。
その内容が、雲のように溶けていく羽の話らしい。
それを見た人の話は、一度持ってみたらしいが、そうすると風でどんどん消えていき、落ちていたところには謎のマークを残していたという、いかにも嘘っぽいはなし。
ちなみに僕は絶対信じない。

そんな、話は99，9パーセントないと思う。
でも残りの0，1パーセントは、
（もし本当だったらからかわれそうで怖い・・・）
という勇気のなさの0，1。
（てゆうか、そんなのがあったら怖いでしょ！）
（99，9パーセントじゃなくて、100パーセントありえない！）
（誰かのほら話なんかにだまされないようにしないと！）
心の中で、そうつぶやいた。
でもクラスメイトはどう思っているかも分からない。
なぜなら、自分の意見を共有できる人がいないから。

そんな馬鹿らしい話だ。
土日では、小雨の日だった。
そんな小雨の日でも僕は傘をさしている。
薄い空色のパステルカラーの傘が、ポタポタとたれるしずくを受け止める。
そんなテンポの外れたしずくの落ちる音が聞こえてくる中、勇気のない僕が、青紫色のオーラが見えた所に勇気をふりしぼって行くことにした。
山の上の方をみやげたが、青紫色のオーラをまとっていない神社がうっすら見えた。
「確かにここだったけど」
うっすらと少し壊れている鳥居が僕の目に入る。
「やっぱり僕の見間違えだったんだな」
「よかった～」

第2章　みょうな噂

引っ越しのトラックが着き、新しい生活、新しい学校、新しい出会いなど、たくさんの新しいと出会った。だが、まだ緊張は止まらない。
明日から、初めての学校。僕は心の中で、「友達なんて出来ないかもしれない…」と、つぶやいていたりした。
いよいよ初めての学校に出発。顔はひきつり、足を少しずつ前に運び、とぼとぼと歩いていった。
先生が黒板に僕の名前を書くと同時にクラスでざわめきが起こった。

「赤星が名字なの？　ヤッバ」

「何できんのかな？」

「一番後ろのあいてる席に座ってくれ」

先生がニコニコして言ってくれた。それで自分の緊張の糸がほぐれた気がする。
ざわめきが止まらないクラスの中でただ一人、黙り込んでいる人がいた。
その子はずっと空をながめている。
何か飛行機でも飛んでいるのかと思い僕も空をみようとした。
でも遅かった。先生が急に、

「朝のホームルームを終わるぞ」

と言った瞬間みんな立ち上がる。少し遅れとってしまったが、なんとか朝のホームルームが終わった。
恥ずかしがりやの僕にはこれだけでもすごいハードな事。